



韓国体育科学研究院 (KISS) 施設見学 およびその取り組みについて

久木留 毅 (文学部准教授)、時任 真一郎 (法学部准教授)、富川 理充 (商学部准教授)

韓国体育科学研究院 (Korea Institute of Sport Science, KISS) は、国民体育振興財団 (Korea Sports Promotion Foundation, KSPF) の下部組織として 1989 年に設立された、日本でいう国立スポーツ科学センター (Japanese Institute of Sports Sciences, JISS) のような組織である [その前身のスポーツ科学研究所 (Sports Science Research Center) は 1980 年に設立されていたために、韓国スポーツ科学センターと呼ばれることもある]。韓国オリンピック委員会 (Korea Olympic Committee, KOC) の運営する秦陵選手村 (秦陵トレーニングセンター) に隣接し、約 40 名の専門の専任スタッフが常駐している。

施設の視察に先立ち、KISS の概略、活動、ビジョン等についての紹介が VTR を用いてなされ、その後同研究院のジョン・ドクシク院長、ソン・ホンソン研究員らと会談し、同研究院や当研究所らの具体的な活動内容について情報交換を行った。

特筆すべきことは、JISS は自然科学系を

専門とする研究者が多く在籍しているのに対し、KISS はオリンピック等の世界を舞台にして活躍する、あるいは活躍が期待される強化選手を支援するスタッフや、健康運動指導士を育成するスタッフに加え、スポーツ政策・戦略を立案する人文社会科学系のスタッフを充実させているところであった (研修会開催時現在、人文科学系専任スタッフ 18 名 / 38 名)。この体制が整備されていることにより、現場と連携を持ちながら計画的な育成・強化システム、あるいは健康支援システムを構築し施策として推進することが可能となり、一方では測定データの分析とそれを基とした結果のフィードバックが効率的に行われることとなる。その成果が近年の韓国選手の世界での活躍につながっているのだろうと強く感じられた。また、一般の国民に対しても広く運動を推奨しており、運動参加者にインセンティブを与える制度を整え実践している施策 [国民体力 100 計画 (National Fitness 100 Project)] 等が紹介された。このような施策が日本では実現可能なかどうか、改めて世

界から、特に隣国である韓国から日本の現状を改めて考えさせられた絶好の機会であった。

施設において非常に印象的だったのは、生理学実験室や力学測定室などに、即時的にデータを分析、フィードバック可能な最先端のシステムを備えた測定機器が整えられていることもさることながら、過去に用いられていた測定機器等を展示するコーナーが設けられていたことである。これは筆者らの穿った見方になってしまうだろうが、過去があったの現在であると訴えられているようでもあった。

KISS への視察を通し研究と現場、あるいは研究と教育の連携や橋渡しの重要性を改めて認識できた。それらを実践可能とした KISS の運営には参考にすべき多くのことがあり、今後も交流を継続し深めながら、当研究所なりの社会貢献活動を推進していきたい。



ライフル競技の動作分析。リアルタイムに分析され、フィードバックされる。また、過去の測定データおよび競技データなどデータベース化されており、随時活用できるシステムが構築されている。



広大な施設の中に、ウェイトマシン、フリーウェイト、自転車エルゴメーター、ランニングトレッドミル、上り綱など多目的のトレーニングに対応できるようになっている。